

「スポーツと文化性」

コロナの危機を必要以上に煽っていたかのようなメディアも、今はオリンピック一色のようだ。世界の一流のパフォーマンスに日々酔いしれる人も多いことだろう。そこにアスリートの隠れた秘話などが一緒に報じられたら、誰もが東京でのコロナ感染の深刻さを忘れてしまうかもしれない。

この時期だからこそと思い、スポーツをより楽しむとしたら、スポーツをトータルに捉える視点で見れば、アスリートの秘話より「いとをかし」な話もあるような気がする。例えば、柔道の審判はまぎれもなく日本語を使っている。日本のスポーツだからというだけでなく、どのようないきさつで日本語の審判用語が使われるようになったのか、それだけでも興味深い。もし、大相撲が国際競技になれば、行司役の審判は「残った！残った！」と連呼するのだろうか？

スポーツがその国の文化性を物語っているといえば、ラグビーの「ノーサイド」というゲームの終了コールの意味も面白い。「サイド」とは「側」という意味である。敵の側と味方の側に分かれて戦い、ゲーム終了と同時にその敵と味方の「側」がなくなり、「さあ仲良くお酒でも飲みましょうよ！」というのが「ノーサイド」の持つ意味である。つまり、紳士の国イギリスのスポーツは社交の精神を重んじている。ラグビーでは、自分の前にいる見方にパスすればスローフォワードとなり、サッカーではオフサイドという反則がある。なぜそれらが反則なのかは、ともに紳士的な攻撃でないという考え方を含んでいる。ゴルフが18ホールで戦うのも、お酒も飲みながらプレイしていたら、18ホールぐらいでちょうどボトルのお酒がなくなり社交を終えたのだと、今でも語り継がれているらしい。本当かどうか定かではないが（笑）。

そんなことを思いながら、ふと日本選手が活躍するテレビ画面にひきつけられている自分に気づく。スポーツはハイレベルなスキル、つまりパフォーマンスだけで成り立っているわけではない。発祥地の文化があり、長い歴史の中で用具やなどの開発あり、ルールの変遷も続けられてきた。そんな報道もメディアに期待したい。

(丹羽 豊)